

Jane Eyre 試論

——ジェンダー・人種・階級をめぐる問題——

香山 はるの

1847年に出版されたCharlotte Brontë (1816-1855) の*Jane Eyre*はこれまで実に様々な観点、解釈の方法によって論じられてきたが、21世紀を迎えた現在この作品の批評はどのような方向へ向かおうとしているのか。今日色々な意味で作品世界の「中心」に位置しない「周縁的」存在の視点からいわゆる「カノン」と呼ばれる小説、或いはそこに提示されている価値体系を、読み直そうとする作業がしばしばなされているが、*Jane Eyre*もその例外ではない。とりわけ1960年代以降盛んになったフェミニズム、そしてより最近では人種的偏見や弾圧など様々な形で表れる帝国主義的言説を問い直すポスト・コロニアル批評の影響がこの小説をめぐる議論、批評の動向に顕著に見られるのである。本稿ではこの二つの観点、解釈の方法を取り入れながら、*Jane Eyre*の世界とそれが書かれた19世紀中葉の大英帝国の支配的イデオロギーとの関係を探りたい。特に小説中に描かれる家父長制、階級意識、植民地主義やそれによってもたらされた「他者」との関わりなど当時の社会が内包していた問題に焦点を当て、ヴィクトリア朝作家Brontëの見解、彼女がとった姿勢について改めて考えてみたいのである。

この小説に登場するEdward Fairfax Rochesterの妻、Bertha Mason Rochesterはいわばフェミニズム批評とポスト・コロニアル批評が交差する地点に立つ重要な人物と考えられる。西インド諸島ジャマイカ出身でクレオールの子を持つBerthaは、英国ヴィクトリア朝社会の中では女性という立場に加え、「非白人」という事実によって二重に疎外されている。以下、Berthaというキャラクターの持つ意味、そして彼女とヒロインJane Eyreをはじめとする他のキャラクターとの関わりに注目し、論じていく。

小説全体を通じて、Berthaは主に夫であるRochesterの目を通して飲酒、淫乱、狂気など「墮落」を示す性質をことごとく併せ持った「劣等な」人種として描かれている。ヴィクトリア朝の英国において女性

の淫乱、すなわち過剰な性欲が狂気の誘因とみなされていたことは周知の通りである¹⁾。またSusan Meyerが指摘するように、飲酒と狂気もしばしば関連づけて考えられ、とりわけステレオタイプ化された黒人のイメージに結び付けられることが多かったようである(69)。実際、「クレオール」Berthaの人種的曖昧さにも拘らず、彼女が小説中姿を現すにつれ、その肌の「浅黒さ」が「激情」による狂暴性や「酩酊」を暗示させる表現(“the Fury”, “the roll of the red eyes” など)を伴って強調されていく(Meyer, 67-69)。

ここでBrontëと同時代の作家Anthony Trollope(1815-1882)の旅行記*The West Indies and the Spanish Man*(1860)に注意を喚起したい。Victoria Glendinningの伝記によれば、Trollopeは1858年の冬郵便局の仕事のため西インド諸島に派遣された(245-246)。翌年ロンドンで出版された旅行記はTrollopeの言う「黒い友達」(“our sable friends”)、すなわち西インドの現地人に対する強い偏見、侮蔑の念に満ち満ちている。“These people are a servile race, fitted by nature for the hardest physical work, and apparently at present fitted for little else”(15)。こういった人種の優越感が当時の英国において決して珍しいものでなかったことは、例えばエリック・ウィリアムズの『帝国主義と知識人—イギリスの歴史家たちと西インド諸島』の中で検証されている。

Berthaのキャラクターについて既に示唆したように、*Jane Eyre*という小説もこうした帝国主義的イデオロギーから解放されているとは言い難い。問題はこのようなイデオロギーが英国人Janeを中心とした物語の中でどのように展開されていくのか、そして作者Brontëがそれに対して最終的にどのような立場をとっているのかである。一言で言えば上に見たような大英帝国のイデオロギーは、*Jane Eyre*において非常に複雑かつ巧妙な形で表れているように思われる。*Imperialism at Home*の中でSusan MeyerはGayatri Chakravorty Spivakの*Jane Eyre*論に言及し、「帝国主義的原理体系のイデオロギーが疑問視されることのないまま、Brontëの物語に浸透している」というSpivakの主張に反論しているが(64)、私もMeyerの見方に基本的に同意する。BerthaがJaneや他のキャラクターとの関係の中でどのような役割を持っているのか—この点を考えてみると、Brontëが何の問題意識も持たずに当時の支配的な価値観を受容していたとは判断し難いからである。例えば、Janeと

の会話の中でRochester自身がソーフィールドの館を呪われた「アカンの天幕」(“tent of Achan”, 338)と呼んでいるのは意味深い(Meyer, 71)。これは旧約聖書ヨシュア記7章21節への言及であり、具体的にはアカンが他民族から不当に奪った美しい上着や銀、金の延べ板を天幕の下に隠し、イスラエルの子供に呪いをもたらしたという話に依拠している。そしてこの言葉が暗示しているのは、例えばJaneが館を歩き回って目にする美しい食堂、設備の整った図書室、豪華な部屋の数々は、Rochesterが西インドの農場主の娘Berthaとの結婚で手に入れた「汚れた」財産—すなわち英国植民地における「奴隷労働」によって産み出された富—に他ならないという事実である(Meyer, 71)。こうした観点から見ると、Brontëが英国植民地主義に対して無批判ではなかったという事実、いやむしろ彼女が抱いていた疑念や不安が浮上してくるのではないかと。

また「道徳的狂気」²に陥ったBerthaが自分を幽閉してきたRochesterに対して抱く燃えるような憎しみ、反逆心は、ある意味でヒロインJaneが時折見せる激しい感情と重なるところがある。Sandra GilbertとSusan Gubarの有名な*The Madwoman in the Attic*はまさにこの点を指摘している。GilbertとGubarは特にJaneとRochesterの婚約期間におけるBerthaの行動に注目し、BerthaをJaneの「真の姿に最も近い、暗黒部分の分身」(“truest and darkest double”)、すなわちゲイツヘッドでの子供時代からJaneが抑えようとしてきた「荒れ狂う秘密の自我」(“the ferocious secret self”)であると論じている(360)。例えば24章でJaneは、自分に宝石や絹織物など高価な贈り物を次々に与えようとする婚約者Rochesterの中に、飾りたてた「女奴隷」を眺めて自己満足的な喜びに浸る「サルタン」(“sultan”)の姿を見出し、漠然とした不安、反発を感じる。男女対等な関係を求めるJaneにとって、このようなプレゼントはまさにRochesterと自分との経済的な格差を思い起させるものに他ならない。こういった角度から見ると、続く章で語られる、BerthaがJaneの豪華なウェディング・ヴェールを引き裂く行為は、Janeの「支配と隷属」の関係に基づいた結婚への抵抗であり、ある意味では彼女自身が心のどこかでしたいと望んでいたことではないかと考えられるのである(Gilbert, 359)。

Rochesterとの関係に限らず、Janeの成長の幾つかの段階においてし

ばしば立ちはだかるのが、家父長的な男性の権威とそれによる抑圧である。小説中の主要な男性—残虐な「ローマ皇帝」(17)にたとえられるJohn Reed、「黒い柱」(40)といった「男根」を暗示させるような言葉で(Gilbert, 344)描写されるローウツドのBrocklehurst牧師、そして神への奉仕という大義名分を掲げるマシューエンドのSt. John Rivers—などは、いずれも「女性のコミュニティにおける唯一の男性」(Rigby, B., 17)であり、ジェンダーのヒエラルキーのもとに専制的な権力を振るう。例えばJohn Reedは「子供部屋のスケープゴート」(23)のJaneに暴力を加え、偽善的な禁欲主義者 Brocklehurstは育ち盛りの女生徒たちを飢えさせ、その上窮屈な服に押し込めたり髪を刈り取るなどして彼女らの「セクシュアリティ」を無理に抑制する(Winnifrith, 38)。さらにSt. Johnに至っては、彼のプロポーズを断り精神的な呪縛から逃れようとするJaneを「野蛮」で「女らしくない」、「不実だ」(459)と横暴にも言い放つ。以上それぞれ状況は異なるものの、こういった男性たちとの関わりにおいて、Janeがしばしば自らを虐げられた「奴隷」にたとえているのは興味深い。³ 実際彼らとの闘いを経てJaneは成長していくのであるが、その過程で見られるJaneの怒りは支配・抑圧される立場という点で、「劣性」の烙印を押され監禁された「浅黒い」Berthaの激情、夫への燃えたぎる復讐心に通じるものがある。ここにBrontëの「弱者」に対する関心、ジェンダーや人種をめぐるヒエラルキーの中で苦悶する者への共感が認められるのではないか。

しかしながら一方で否定できないのは、Janeそして究極的にはBrontë自身が一人の人間としてのBerthaに深い同情を感じていないという点であろう。これがこの作品全体のヴィジョンを複雑なものにしている。例えば小説中、外国、或いは外国人は概して「汚染された」ものとして、清潔で健全な英国、英国人と対比されていることに(Meyer, 84)注目してみよう。Meyerも触れているが、以下に引用するRochesterの回想(27章)によれば、かつてジャマイカの重苦しく立ちこめた大気から彼を救い出したのはヨーロッパから入ってくる清らかな空気であった。

It was a fiery West-Indian night; one of the description that frequently precede the hurricanes of those climates; ... The air

was like sulphur-steams ... Mosquitoes came buzzing in and hummed sullenly round the room; the sea ... rumbled dull like an earthquake - black clouds were casting up over it; the moon was setting in the waves, broad and red, like a hot cannon-ball - she threw her last bloody glance over a world quivering with the ferment of tempest. (346)

こうした暑苦しいよどんだ雰囲気と「狂った」妻の「悪魔のような」憎悪をこめた叫び声に感化され、絶望的な気持ちになった Rochester は自殺さえ考える。するとその時、一陣のさわやかな風が吹き込み、彼に取るべき道を示したという。“A wind fresh from Europe blew over the ocean and rushed through the open casement: the storm broke, streamed, thundered, blazed, and the air grew pure. I then framed and fixed a resolution” (347)。「汚れた」外国と「清らかな」英国—Rochester によって構築されたこの対比はまた、彼がその後持った数々の愛人が全て外国人であったこと、そして結局はそうした「墮ちた女」たちにも飽き、Jane のような純粋で正直な女性と会うべくして英国に戻ってきたこととも無関係ではなかろう。さらにつけ加えるならば、「淫乱な」妻を持った我が身を嘆く Rochester 自身が放埒な生活を送っていたこと—ここに皮肉があり、当時の社会に根強い性のダブル・スタンダードが認められるのである。

そして重要なことに Jane、さらには作者 Brontë もこうした人種やジェンダーに関する偏見に加担しているところが少なくない。例えば 31 章で Jane は愛人になってほしいと懇願したかつての恋人 Rochester のことを思い出し動揺するが、次のように自問して騒ぎつつ心を静めている。“Whether is it better ... to be a slave in a fool's paradise at Marseilles - fevered with delusive bliss one hour - suffocating with the bitterest tears of remorse and shame the next - or to be a village schoolmistress, free and honest, in a breezy mountain nook in the healthy heart of England?” (402) このように、Jane の価値観の中では明らかに「堅実な英国中部の涼しい山陰」が「刹那的な喜びに満ちたマルセイユの幻影の楽園」の上位に置かれているのである。

また Jane は Rochester に向かって、一度だけ Bertha のことを「あの気

の毒な婦人」(“that unfortunate lady”, 339) と呼びある種の哀れみを示すが、その他の箇所では Bertha を「吸血鬼」(“Vampyre”, 317)、「獣」(“beast”, 327)、「衣服を着たハイエナ」(“the clothed hyena”, 328) などと表現しており、殆ど人間扱いしていない。まして Bertha を「父権社会の中で抑圧された自己の分身」のように感じたり、或いは「英国の植民地主義に巻き込まれた犠牲者」と見ることなど論外である (Plasa, 74)。そして Brontë 自身もこのような対比—Rochester と Jane が共有する「汚れ、墮落した外国(人)」と「清く、健康的な英国(人)」という概念—を結局は崩していないのである。

この点をより明確にするため、少し前に言及した Anthony Trollope に再び触れてみたい。Trollope は一般に英国の伝統的な価値を重んじる「体制寄り」の作家として捉えられることが多い。確かに先に挙げた *The West Indies and the Spanish Man* にちりばめられた彼の人種の優越感やヨーロッパより狭い意味では英国—偏重の考えは、こういった従来の評価の裏付けになるかもしれない。しかし、特に 1860 年代以降の Trollope の小説では、必ずしも支配階級のイデオロギーが強く支持されてはいないのである。むしろ「支配—被支配」「中心—周縁」という基本的な構造が脅かされるケースが顕著である。例えば 1875 年に出版された後期の代表作の一つ、*The Way We Live Now* を見てみよう。この作品に登場するユダヤ人の投機家 Augustus Melmotte は当初、「いかがわしい他者、信用できない外国人」として伝統や慣習を信奉する Roger Carbury のような「誠実で責任感の強い カントリージェントルマン」と対置されている。しかし小説の後半、Trollope が Melmotte の内面—すなわち一人の人間としての彼の苦悩や孤独—に焦点を当てるとき、こうした単純な対比は疑わしいものになっていく。

また Winifred Hurtle という脇役のアメリカ人女性についても同様のことが言える。Winifred は一見いかにも「家庭の天使」という理想像からかけ離れた、我の強い攻撃的な人種に見える。けれども Trollope は彼女の Paul Carbury に対する愛がいかにか深いか示すことによって、この「墮ちた女」に「イノセンス」を見出だすよう読者を促していく。実際 Winifred の粗野で自暴自棄な行動は、酒に溺れた前夫やオレゴンで出会った悪漢、そして「紳士的な」愛人 Paul らから受けた酷い仕打ちに起因するところが大きい。“Shall a woman be flayed alive because it is

unfeminine in her to fight for her own skin? What is the good of being—feminine, as you call it?” (II: 8-9) 彼女のこの叫びは「女らしさ」という既成概念への挑戦である。Winifredの女としての悲しみ、怒りはPaulやRogerに代表される「お上品な」英国紳士階級の偽善を暴き、その道徳的基盤を揺るがす力をも秘めているのである。

一方これと比較すると、*Jane Eyre*の世界はより保守的であり、作者(Brontë)の手法もより巧妙であると言わざるをえない。社会における女性の従属的立場を自ら意識していたBrontëは、この作品に登場する多くの人物をめぐる「男性(中心)と女性(周縁)」といった基本的枠組を設定する。しかし彼女の目的はこの関係に抜本的な変革をもたらすことではない。むしろBrontëはさらに人種の優劣というイデオロギーをそこに持ちこむことで、本来共に「周縁的」存在であったはずのJaneとBerthaの差異を強調する。こうしてBrontëは「男性の支配と女性の隷属」といった一般的な図式をほかし、問題の解決を例えばJaneとRochesterというような個人レベルの関係に求めようとするのである。

この意味ではまたJaneがRochesterとのやりとりの中で、インドのヒンドゥー教徒の寡婦殉死、「サティー」(“suttee”)を引き合いに出している点も重要である。言うなれば、こうしたヒンドゥーの女性とJaneの差異こそがRochesterと彼女の間にあるジェンダーや階級における力関係を解決し(Sharpe, 49)、二人を「精神的に対等な」(Eagleton, 29)結婚へと向かわせるのである。24章でRochesterが、愛する男性と生死を共にすると誓う女性への讃歌を情感をこめて歌いあげると、Janeはそれが自分に対する愛情表現だと感じつつもはねつけるように言う。“I had as good a right to die when my time came as he had: but I should bide that time, and not be hurried away in a suttee” (306). ここでJaneが反発しているのは言うまでもなく、「サティー」という自己犠牲的な風習に象徴される女性の従属的な立場である。そして彼女はいわばそういったヒンドゥー教徒の女性の生き方を否定することによって、自己のアイデンティティを主張しているのである(Sharpe, 52)。Jenny Sharpeの説明にもあるように、19世紀の大英帝国は「サティー」という野蛮で残酷な慣習から「気の毒な黒い女たちを救い出す」使命を口実に、インドにおける植民地政策を強化していったという(50-52)。このよ

うな東洋に対する「道徳的優越感」(Sharpe, 52)は実はJaneも共有するものである。別の箇所ではRochesterが自らを「トルコの皇帝」にたとえた時も、Janeは自分は「伝道師」になって彼の奴隷となった後宮の女たちに自由を説き、反乱を起こすよう扇動するとやり返し(302)、「文明人」としての誇りを見せている。さらに留意すべき点は、Brontëが「サティー」や「トルコのハーレムの女奴隷」といったイメージを駆使して、東洋と独裁的、抑圧的な慣習を結びつけていることである(Meyer, 82)。Meyerも示唆するように、こうしてBrontëは英国による圧制—例えばアフリカ人の奴隷化等の歴史的事実—から自分及び読者の目を巧みにそらしているように思われる(83)。

実際、この作家が極めてヨーロッパ中心主義的な視点に立っていることは否定できないであろう。Alan Bewellが書いているように、結局のところBrontëは英国の植民地主義が他国に及ぼす害悪よりも、むしろそれが本国の社会生活に跳ね返ってくる影響に懸念を抱いていたようである(289)。例えば奇妙なことに、この小説の中でJaneを蔑み、彼女に自分が社会階級のヒエラルキーにおいて下位に属していると痛感させる上流階級の人達—John Reed、Reed夫人、Blanche Ingramとその母親など—の外観が、例えば「浅黒い肌」(16)や「漆黒の髪」(181)、「膨れた顔」(195)、「がっしりとした体格」(247)など「劣った」人種であるBerthaに似た特徴を持っていることがしばしば暗示される(Meyer, 78 - 80)。加えて、Reed夫人やBlancheの描写に「傲慢な」(“imperious”)、「専制的な」(“despotic”)といった「帝国主義」を連想させる語が時折使われることも、注目に値する(Meyer, 79)。つまりBrontëはこうしたキャラクターを創造するに当たって、大英帝国の植民地主義によって生じる人種的「他者」との接触が、本国の支配層に「肌の黒さ」や「傲慢さ」など望ましからぬ性質をもたらしたことを暗示しているのである(Meyer, 79)。このようなBrontëの恐れ、危機感、Reed家の人々やBlancheが後に破産や死、縁談の失敗等に見舞われ、ストーリーから「片付けられる」という筋書きにも見出させるのではないか。

*Jane Eyre*は究極的には、殆ど排他的と言えるほど英国中流階級—より厳密には下層中流階級(Meyer, 86)—を中心に展開している。ヒロインの中流階級としてのプライドは、貧乏を墮落と見做す考えや無教

育の労働者階級に対する差別意識など小説中様々な形で表れている。例えばモートンの村の学校で貧しい「無知な」子供たちに教え始めた日、Janeは自らの境遇を恥じる気持ちで一杯になったという。“I felt desolate to a degree.. I felt- yes, idiot that I am- I felt degraded. I doubted I had taken a step which sank instead of raising me in the scale of social existence” (402). またMeyerも書いている通り、33章でJaneは伯父が残した遺産の「平等な」分配を主張するが、結局この富が再分配されるのもやはりRivers兄妹という下層中流階級に限られるのである(86)。

小説の前半で、自由や平等を高らかにうたうJaneはいかにも反逆的、革命的なエネルギーを体現しているかのように見える。“Millions are condemned to a stiller doom than mine, and millions are in silent revolt against their lot. Nobody knows how many rebellions besides political rebellions ferment in the masses of life which people earth” (125). また23章で、激情に駆られたJaneは自分の雇い主であるRochesterに次のように訴える。

“Do you think, because I am poor, obscure, plain, and little, I am soulless and heartless?—You think wrong!—I have as much soul as you,—and full as much heart! And if God had gifted me with some beauty, and much wealth, I should have made it as hard for you to leave me, as it is now for me to leave you. I am not talking to you now through the medium of custom, conventionalities ... it is my spirit that addresses your spirit; just as if both had passed through the grave, and we stood at God’s feet, equal—as we are!” (284)

これは当時の社会では考えられないような女性からの赤裸々な愛の告白であり、またジェンダーや階級における抑圧的なヒエラルキーに対する憤怒の叫びである。このようなヒロインに当時の文人Elizabeth Rigbyが「チャーチスト運動を引き起こしたのと同じ精神」(Allott, 109-110)を見、強い反発を覚えたのもある意味で無理からぬことであらう。

しかし既に示唆したように、Janeの「革命的な精神」が本当に「こ

の世の無数の暮し」(“the masses of life which people earth”)を視野に入れたものであるのかかなり疑わしい。実のところ、それは専ら中流階級の生活向上という方向にのみ向かい、労働者階級、さらにはBerthaのような人種的「他者」もそこから排除されているのである(Meyer, 233)。結末におけるJaneとRochesterの幸福がこの「第三世界」の女性の犠牲の上に成り立っているという点も看過できない。

*Jane Eyre*はジェンダーや人種、階級における19世紀の支配的イデオロギーを無条件には受容せず、部分的にはあるが強い抵抗も試みている。しかしこれまで見てきた通り、最終的には既存のヒエラルキーを保持したまま限定された、狭い意味での解決しか見出だしていない。急進的な要素と保守的な要素が微妙に入り交じり織り成すこの作品の世界は、Brontëのアンビヴァレントな姿勢や内なる葛藤を示すものであろう。

*Jane Eyre*出版からおよそ120年後、BrontëのBerthaの扱いに憤りを覚えた西インド諸島出身のJean Rhys (1894-1979)が、そのクレオール「狂女」を主人公にして、この小説のいわば「前編」に当たる*Wide Sargasso Sea* (1966)を書いたことはよく知られている。Bertha—本名Antoinette Cosway Mason—とEdward Rochesterの関係に焦点を当てたこの作品は、二人の結婚において「白人と非白人」、「男と女」、「持てる者と持たざる者」、「正気と狂気」といった「支配—被支配」の力関係が残酷なまでに築かれ、強化されていく過程を描きだす。ここでは特に結末場面—*Jane Eyre*と*Wide Sargasso Sea*、二つの小説を結びつける部分—を取り上げたい。

Antoinetteが夢の中で(後に現実になる)、かつてジャマイカで解放奴隷たちが自分の家を焼き討ちしたようにRochesterのソーンフィールドに火を放つのは興味深い。彼女をめぐる物語は概して痛ましいが、この放火もまたその破滅性ゆえに悲劇的と言えるかもしれない。しかし見方を変えるとこれは、暗く冷たい英国の階層社会の中で幾様にも疎外され、閉塞状態にあったAntoinetteが自己を回復するのに必要かつ唯一可能な手続きであったのかもしれない。⁶ 夢から覚めた彼女は確信する。“Now at last I know why I was brought here and what I have to do” (124). そして「私を憎んだ男」(Rochester)が「パーサ! パーサ!」と呼ぶのを振り切るようにして、闇の中に見た故郷の幼なじみの名前

を叫びながら（「ティア！ ティア！」）胸壁を飛び降りるヒロインの行為は、彼女を抑圧する社会への命を賭けた抗議であり、また Rochester、さらには Charlotte Brontë が押しつけた偽りの自分、「狂女バーサ」からの解放に他ならない。“Bertha is not my name. You are trying to make me into someone else” (94). エンディングにおける Antoinette の「焼き討ち」は、—たとえそれが東の間であっても—社会の様々なヒエラルキーにおける「支配—被支配」の関係を転覆させる、Brontë には果たし得なかった「革命」なのである。

註

1. この点については、Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980* (New York: Pantheon, 1985) を参照。pp.51-73.
2. この言葉を Charlotte Brontë は 1848 年 1 月 4 日付けの W.S. Williams に宛てた手紙の中で用いている。*The Brontës: Their Lives, Friendship, and Correspondence*, vol. II, p.173.
3. *Jane Eyre* における「奴隷」のメタファーについては、Carl Plasa, *Textual Politics from Slavery to Postcolonialism* (Basingstoke: Macmillan, 2000) の 3 章に詳しい。pp.60-81.
4. さらに、この John Eyre の財産もおそらく奴隷貿易によって築かれたものだという皮肉がある。Meyer, p.93.
5. Lynda Nead は *Myths of Sexuality* の第一章でヴィクトリア朝時代の英国中流階級における「女らしさ」の規範について説明している。pp.12-47.
6. 例えば E. R. Baer は *Wide Sargasso Sea* を、父権社会におけるヒロインの自己認識への過程を描いた一種のビルドゥングスロマンと考えている。p.134.

引用文献

- Allott, Miriam, ed. *The Brontës: Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1974.
- Baer, E. R. “The Sisterhood of Jane Eyre and Antoinette Cosway.” *The Voyage In: Fictions of Female Development*. Ed. Elizabeth Abel, Marianne Hirsch, and Elizabeth Langland. Hanover: UP of New England, 1983. 131-148.

- Bewell, Alan. *Romanticism and Colonial Disease*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1999.
- Brontë, Charlotte. *The Brontës: Their Lives, Friendships & Correspondence*. Ed. Thomas James Wise and John Alexander Symington. Vol. II. 1844-1849. Philadelphia: Porcupine Press, 1980.
- . *Jane Eyre*. London: Penguin, 1996.
- Eagleton, Terry. *The Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës*. London: Macmillan, 1975.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Glendinning, Victoria. *Trollope*. London: Pimlico, 1993.
- Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction*. Ithaca: Cornell UP, 1996.
- Nead, Lynda. *Myths of Sexuality: Representations of Women in Victorian Britain*. Oxford: Basil Blackwell, 1988.
- Plasa, Carl. *Textual Politics from Slavery to Postcolonialism: Race and Identification*. Basingstoke: Macmillan, 2000.
- Rhys, Jean. *Wide Sargasso Sea*. London: Penguin, 2000.
- Rigby, Barbara Hill. *Madness and Sexual Politics in the Feminist Novel: Studies in Brontë, Woolf, Lessing, and Atwood*. Madison: U of Wisconsin P, 1978.
- Sharpe, Jenny. *Allegories of Empire: The Figure of Woman in the Colonial Text*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1993.
- Showalter, Elaine. *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830-1980*. New York: Pantheon, 1985.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. "Three Women's Texts and a Critique of Imperialism." *Critical Inquiry* 12 (1985): 243-261.
- Trollope, Anthony. *The Way We Live Now*. Oxford: Oxford UP, 1991.
- . *The West Indies and the Spanish Man. Trollope the Traveller: Selections from Anthony Trollope's Travel Writings*. Ed. Graham Handley. London: William Pickering, 1993. 1-51.
- ウィリアムズ、エリック『帝国主義と知識人—イギリスの歴史家たちと西インド諸島』田中浩訳 東京：岩波書店、1999。
- Winnifrith, Tom. *Fallen Women in the Nineteenth-Century Novel*. Basingstoke: Macmillan, 1994.